ESSAY

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。
氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#36
FIATとTORINO国立自動車博物館

FIAT王国トリノとアニエッリ

FIATと言うとトリノ、トリノと言うと我々日本人でもFIATを連想するほど密接な関係にあるのではないだろうか。現在ではフィアット・クライスラー・オートモビル（FCA）としてFIAT創業者の一人であったアニエッリ家が実権を握っている。傘下にはクライスラーを始め、アルファロメオ、アバルト、ランチア、マセラッティ、ジープ、ダッジ、ラムトラックスを有している。フェッラーリも別会社ではあるが実権をやはりアニエッリ一族が経営権を有している。FIAT王国=アニエッリ王国は未だ健在である。

しかしFIAT車の殆どがイタリア以外の国での生産となった今、トリノ郊外のFIAT本社工場だったリンゴットはホテルやショッピングモールへと変貌してしまった。トリノ市内で乗ったタクシーはなんとトヨタ プリウスだったことに、もはやトリノはFIATの街ではないのだと感じさせるに十分だった。今やトリノは冬季オリンピックを契機に美しい歴史ある世界遺産都市として、観光を大いにアッピールしているようだ。

前FIAT会長のジャンニ・アニエッリの事は、イタリア人の友人達から彼の経済人としての実力や武勇伝、ヨーロッパを代表するファッションアイコンとしての顔とか、いろいろ聞くことがあった。彼は若くして2代目FIAT社長の父親を亡くしたが、番頭がしっかりと会社の経営を進めていたので、有り余る資金を使って世界の要人や上流階級の人々との交流によって、人脈を大いに広げたという。彼の母親が貴族の出であったことから、各国の王家とも親密な付き合いも出来た。

後にFIAT社社長になってからもプレイボーイ振りは大いに発揮された。友人から聞いた逸話で面白かったのは、チャーチルの長男の妻との不倫が報じられたのだが、その事がアニエッリが第二次世界大戦の仇を討ったと好意的に報道されたという。僕自身の想い出として記憶に残っているのは、世界の財閥の一人アーガ・ハーン4世と共に大西洋横断レース『ブルーリボン賞』挑戦の為にKamewa製ウォータージェット装備の223フィート、デストリエーロ号（Destriero）で賞をとった直後、アーガ・ハーンの開発したサルデーニャ島ポルト・チェルボに陸揚げされた艇の巨大な推進装置に遭遇し驚愕した事だ。因みに操船は、世界ラリー選手権のランチアチームやF1スクーデリア・フェッラーリチームの指揮を執ったアニエッリお気に入りのトリノ出身のチェーザレ・フィオリオだった。彼もまたサングラスの似合うナイスガイだったという。

またある時は、ミラノのYシャツの仕立屋で襟の選択を迷っていたら店の主人が「今流行のアニエッリスタイルがいいですよ」と勧めてくれた。後にこのシャツを着てイタリアの友人のパーティに出ると、「おお、アニエッリカラーじゃないか！」と数人から褒められる結果に。この時もアニエッリの影響力に驚いた事を覚えている。彼の亡き後、今でもしっかりと彼の孫らがFCAやフェッラーリのトップを務めている。

1954年のFIATのコンセプトカー「TURBINA（トゥルビーナ）」。展示説明によると、ヨーロッパ大陸初のタイプ8001ガスタービン車。6年の歳月をかけ、リンゴットのFIAT本社屋上トラックでテストドライブの後、1954年にトリノモーターショーで発表。ジャンニ・アニエッリは特にこのTURBINAに力を注いだという。ノーギアボックス、ノークラッチのTURBINAは300ph（220KW）のパワーで時速250km/hを叩き出し、流線型のボディはその後、空気抵抗の最も低い値（Cd値 0.14）の記録を30年間保持し続けた。

トリノ国立自動車博物館の「人と車」の展示コーナーでは、1920年代の禁酒法が施行された時代、アル・カポネ他のイタリアンマフィアらしき人々の居並ぶ写真を背景に、1936年型のメルセデスベンツ540Kロードスターが。スーパーチャージャー付き5.4リッターエンジンを載せたモンスターは、アウトバーンで170km/h以上のスピードを誇ったという。ロジャー・ムーアの「007」からはシトロエン2CVとロータス・エスプリ。F1レーサーが延々と連なり、背面の大画面の映像がF-1の如く猛スピードで変化しながら流れ去っていく様は圧巻。懐かしの1969年のJaguar E-type シリーズ2 ロードスターは、僕の乗った車の色、シリーズ共に同型だった事で想い出が蘇った。背後には、当時この車が登場した映画のワンシーンが映し出されていた。

トリノ国立自動車博物館

トリノ郊外のリンゴットに1932年創立された国立自動車博物館はヨーロッパを中心とした約200台80ブランドの車がいろいろなテーマで展示されている。さすがイタリアらしいアートフルな空間や演出、展示表現やライティング等眼を見張るものがある。1769年製造の世界初の蒸気自動車から最新モデルまでワクワクとするような空間が次々と現れて時の過ぎるのを忘れてしまった。

1階から3階までそれぞれ「車とデザイン」「人と車」「車と1900年代」というようなテーマ別に展示され、デザインから文化やアート、発展の歴史が簡潔に視覚に訴えかけてくる。この博物館には車の展示のみならず自動車に関する豊富な資料や修復工場もあり、流石に国立と名打つだけの内容に感心。特に興味を持ったのがデザイナーのコーナーだった。顔写真付きの各デザイナーのプロフィール紹介では、「デザインの発想の源泉は?」というような質問形式で行われているのが斬新だ。

僕自身いろいろな車に興味を持って14車種25台に乗ってきたが、デザイナーで選ぶ事もままあった。免許を取って最初の車がカルマン・ギアだったが、デザインはイタリアのカロツェリア・ギア、次のアルファロメオGTヴェローチェがベルトーネ社のチーフスタイリストのジウジアーロ、スパイダーがカロツェリア・ピニンファリーナだ。当時から今に至るまでやはりイタリアンデザインが好きなのは変わらない。然し気に入っていた真っ赤なジャガーEタイプのデザイナーは英国人のマルコム・セイヤーである。

20代の頃ウッカリ路線バスに追突してしまった。Eタイプのロングノーズがなんとバスのバンパー下にスッポリと収まってしまった。急ブレーキをかけて危うくフロントガラス直前で止まった。バスは何事もなかったように発車し、僕はすぐさま降りてボンネットを見ると、ほんの少しのかすり傷が付いている程度だった。

展示されている真っ赤なEタイプに接して、懐かしい想いが蘇った。

日本でも1960年に初のスペシャリティーカーとなったスカイラインスポーツはミケロッティがデザインしイタリアで製造され、トリノショーで発表された。翌年イタリアから職人を招聘して造り方を学んで東京モーターショーに出品している。今ではイタリアのプレジャーボートの造船所の多くがトヨタ方式を学んで取り入れているから、時代は変わったと言わざるを得ない。

Eタイプに限らず自分と共に想い出深い何台もの車に接しながら、その時々の出来事や友人達を思い出し、この時ばかりは車と共に過ぎ去った余韻に思わず浸る一時となった。 ***P.B.***

Profile

伊藤英一

事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。